平成１５年度英語教員指導力向上研修「授業改善プロジェクト」　　番号１５００１

研究テーマ：活気ある参加型授業を作るには

所属　岡豊高等学校
氏名　横山　志保
RG　SH１

１　研究の背景

年度当初に採ったアンケート（資料１）では
中学時代に英語は好きでしたか？ Yes!! ４人　So so.　２４人　No, I hate English.　１３人、
英語を読んだり、英語で話したりするのは好きですか？　Yes!! ３人　So so.１７人　No.２１人
という結果であった。英語を読んだり、話したりすることが嫌で英語が嫌いになっている生徒が多い。読めないから、できないから嫌い、と言う構図を打開させるために、単語・対話文のリピートについては最初から声が出るまでリピートさせてきた。そのためリピートの場面では声を出しているように見えるが、実際は「何もしないで過ごす」生徒を数名含むおとなしいクラスでもあった。これらの生徒の存在は一斉活動の時は表面化しないが、ペアワーク・グループワークになると座って何もしないため、場合によっては活動しようという意欲を持った同じグループの生徒に多大な迷惑を掛けると言う形であらわれてくることになる。しかし、英語Ｉと比べると生徒が楽しそうであり、彼ら自身が活動する場を作り易いと考え、リサーチクエスチョンを設定した。

授業評価の配点は Listening 試験７０点、Speaking 試験１０点、Interview 試験１０点、授業への参加点１０点となっている。参加点は様々な活動を積極的に行わせるために設けている。 ＊参加点　授業時間内に積極的に活動もしくは発表をしたり、ワークシートを完成させた時に与えられるチケット。このチケットの枚数により各々点数が与えられる。

２　リサーチクエスチョン

生徒一人一人に、身近な話題について、あるいはこれから経験するかも知れない状況で使う会話について関心を持たせる。さらにその内容を自分のものとするため積極的に活動し、クラス全体が参加できる活気を持った授業を作るにはどうすればよいか？

３　予備調査

予備調査１　授業観察の結果

自分のポートフォリオと同様に生徒にもファイルを持たせ、授業で使ったワークシート、ゲームのプリント類を綴じていかせた。これを提出させ、その授業にどのくらい参加していたのか、理解できていたのかを計る目安にも使った。残念ながら、未完成のまま提出していたり、綴じずに試験前になって焦る生徒もいた。

予備調査２　英語力を示すデータ

Interview Test :別室で ALT から個人的に Interview を受ける試験。多くの生徒が高得点を取ることができた。これは試験の１０問が最初から提示した質問だったので、それに対して準備がきちっとなされていたためであろう。これで覚えたことは言えるのがわかったが、学習内容をアレンジした質問に対して応答できるかどうかという問題もある。

Speaking Test :２～３名のグループで対話を行う課題。ほとんどのグループで１，２文のオリジナルを交えた対話を暗記して、使うことができていた。中にはジェスチャーを取り入れたグループもあった。評価は １０点２４名、９点１３名、８点２名、５点１名。普段動かない生徒も友人に促され行うことができたようである。グループは任意に作らせたので、仲のよい者同士になっており自分がしないことで友人に迷惑がかかるのを考えたのであろう。ペアが組めない生徒は JTE と組んだ。

Listening Test :（資料４）やはり生徒の活動を多く取り入れた授業をした箇所は良くできているが、リスニングをした上で、その単語を書く問いでは、singing を thinking と間違うなどまだまだ厳しい面が見られる。

tickets : １学期間を通じて渡した English tickets の枚数の最高は４５枚、最低は０枚と、個人によって大きな差がついた。４０枚、４５枚と取っている生徒はクラスのムードメーカーでもありこの生徒の動きによって、雰囲気が左右されるとも言える。残念なのはよく理解している生徒たちが１５～２０枚とまだまだ積極的に発言しているとは言い難いことである。０枚は３名おり、これらの生徒の授業への参加はほとんど見ることはなかった。

予備調査３　アンケート、授業評価の結果

アンケート（資料１）
授業評価システム　No. 1　（資料２）
Handout, Worksheet の使用により、１．学校で学ぶ科目について学ぶ、２．学校の時間割について述べたり、尋ねたりする表現を学習する、の２つを行った。Handout の作り方、教授方法についての評価は概ね良かったが、クラスの時間割を板書するという予想外に黒板を使うことがあり、急いで板書をした結果、それに対する評価が低かった。また、一つの活動が長く続き、集中力がとぎれる場面があったので、もっとテンポを上げるかアプローチの仕方に変化を持たせる必要がある。
授業評価システム　No. 2　（資料３）
Handout, Worksheet の使用により、１．料理とそれに関連した表現を学ぶ、２．レストランで注文するときの表現を学習する、の２つを行った。少し進める速度が速かったため、注文の仕方をしっかりと定着させるには至らなかった。教授方法や声の出し方、Handout については大半の生徒が very good,もしくは good を選択していたが、それがそのまま self-evaluation に反映できていない。特に授業への積極的参加ができていたかという質問では all the time ９人、 most of the time １６人 、some of the time １３人 none of the time ２人であった。この結果から、授業のほとんどを理解し、興味を持ち、集中しているにもかかわらず積極的参加ができない生徒が多いということがわかる。これは非常にもったいない状態でもある。some of the time の１３人を all the time , most of the time にもっていくことに英語教師として取り組みの必要性を感じた。
また、一斉活動の際に全員起立させて行ったので、活動せずにいた生徒の人数は前回調査より減った。

予備調査４　生徒の自己評価　授業評価システム　No.1　（資料２）授業評価システム　No.2　（資料３）

相変わらず、集中し、授業に参加していながら「積極的に活動できていない」と自己評価している生徒がいることが、非常に残念である。この生徒たちが積極的に参加できる状態を作り出していきたいと思う。時々、その時間の Key sentence の定着を計るために Criss Cross Game を行ったが、いつ当たるか解らないと言う適度な緊張感を持つので、非常に有効な手段である。

４　仮説の設定

仮説１：座ったままで何もせず、動かない生徒を活動させるためには、最初から立たせた状態で、動かざるを得ない姿勢をとらせれば動くのではないか？

仮説２：T.T.の利点を生かし、より多くの生徒の所を回り、発音や会話を聴いたり質問を受けたりする中で、生徒の活動を促せば、解らないから動かない、発音できないから動かないという状態を解消できるのではないか？

仮説３：グループで競う、ペアで活動させる、生徒間で対話文を完成させる等の課題を与え、その都度評価をし、生徒個々が自ら動かなければならないような活動を取り入れる。

仮説４：授業作りのために不可欠な教師と生徒間のより良い interaction を構築するために、日常的なコミュニケーションをとるようにする。

５ 計画の実践

ワークシート等を使って生徒同士で聞き合う様式では、座ったままで何もしない生徒も活動させる必要がある。そのために、起立させ、発話練習をし、その状態からそのまま活動に移させる。そして、ワークシートが完成した順に端の席から座っていくように指示を出せば、多くの生徒が動き回る状態の中では居場所がなく動かざるを得ないのではないか？また、その時解らなくて動けない、とならないように発音は何度もリピートさせ、ペアワーク、グループワーク、ダイアログの使い方をしっかり定着させておく。その活動の中で、生徒の間を回って発音をチェックし、対話練習に耳を傾け、不安な状態をなくすように心がける。あるいは、生徒間で対話をさせたり、ALT や JTE 相手に対話をさせてみる。

（実践例：資料５）レストランでの会話を練習することでサーバーが言っていることを理解し、適切な注文の仕方を定着させることを目標に行った。デモンストレーションの後のリピートは難なくこなせ、各自それをアレンジした会話を作ることもできた。それらの会話を使って、それぞれが４人の生徒から注文を尋ねられ、答える、自分が尋ね答えてもらうという活動を行った。例に挙げた Menu の多くが生徒にとって未知のものでそれを理解させるのに時間を要した、という計画外のことがあり、そのため定着させたい文の練習時間が少なくなる、というハプニングもあった。今後の教材作成に当たっては注意したい。ここでも、全員を起立させ、動かざるを得ない状態を作り出したが、３名は結局ワークシートの完成を見ないままで終わった。その他の生徒は教室中を動き回り相手を捜し、完成させることができた。参加した生徒は、この会話を計８回練習したことになる。学期末試験では、これと類似した会話文を聴き取り、質問に答える Listening 試験（資料４）を行ったが、全ての生徒が一つを除く全ての質問に正答していた。

６ 実践の結果

実践例のような形式で体も使い動きながら、また、いつも決まった生徒同士ではなくいろいろな生徒と会話をする機会を作ってきた。prepared speech, prepared dialogue から独自のものを完成させ、それをチェックし、練習させ、発表の場を与える、それを評価する、の繰り返しである。また、コントロールされた活動の中から次第に自由度を増すようなオリジナル会話を作らせるなど、生徒の自主的な発想をさせる中で、積極性につなげていく。最初は強制ではあっても、それに向けての準備段階でペアもしくはグループでの活動をさせ、個々の生徒に責任を持たせ、参加を促していく。prepared speech から個人の speech を作らせ、発表させる場、評価する場につなげることにより、「生徒が活動する場」を増やしていく、また、Criss Cross Game、Chinese Whisper 等全員が参加せざるを得ないようなゲームを取り入れることにより、文型の定着を計る。これらの方法が本クラスでは有効であることがわかった。

７ 結果の検証

当初、コミュニケーション活動をするには堅い雰囲気だったが、２学期になり、OCI の授業の「やり方」にも慣れてきたのか、次第に動きの堅さなどはなくなってきた。２学期にも２度評価システムを使ったが、やろうとする意欲、リピートをする生徒の声の大きさ、ペアワーク、グループワークへの参加は向上してきたようである（資料６・資料７）。しかし、一方で、時間切れのため仕上がりを見ないワークシートが増えていった。これは、内容をよく理解させていないまま次の活動に移させてしまったり、１度に求める量が多かったことが原因であり、「理解しようとしたけど難しかった」、「やろうとしたけど難しかった」と解答した生徒もいた。途中まで懸命に取り組もうとしたが、充分時間をかけられなかったのが原因で達成感を感じられなかったのであれば非常に申し訳ない結果である。授業計画を無理のない範囲で立て、理解できるまで、きちんとした input をさせる必要がある。ターゲットセンテンスはもちろん、その活動で使うべき会話はしっかりと定着を計らせ、オリジナルの文の作り方もしっかりと指導する事の必要性、そのためには、しつこいと感じるほどに繰り返し練習させなければ、使えないと言うこともわかった。また、余分な時間をとらないように、ターゲットセンテンス以外は既習、もしくは聞き覚えのある単語や表現を使用するよう、配慮する必要がある。

８ 成果と今後の課題

このクラスで、英語Ｉも担当しており、週５時間の付き合いになるため、マンネリ化しないよう OCI においては授業形態にバリエーションを持たせるべく気をつけてきた。その点では、１時間１時間がチャレンジでありリサーチである。しかし、英語Ｉと比べれば、楽しい取り組みができると考え、リサーチクエスチョンを設定した。その中で、全ての生徒が積極的に活動できる授業内容を模索中である。１回目の授業評価の反省から、生徒が自分の発音、読む力に自信を持たせられるようにリピート回数、テンポ等リピートのさせ方に工夫をしてみた。そして、全体で動く前にペアワークをしっかりとやり、生徒自身でお互いをチェックし、その間の机間指導をする回数を増やし、読めない、解らないという状態を解消するようにしてきた。結果、２回目の授業評価では、数の上では、積極的な取り組みができた生徒が増えてきた。しかし、「何もしない生徒」はまだ残っていた。突き詰めてみれば相性の問題になるかもしれないが、他への影響を無視してでも、これらの生徒を授業へ参加させるべきであるのかどうかが私自身の課題でもあった。しかし、様々な生徒がいる中で、一人一人が生きてくる授業を展開することができれば、授業の成り立ちも変わってくるのではないか、自分自身も非常に楽な気持ちになれるのではないかと考える。これら生徒は speaking test の準備段階では積極的に取り組んだり、会話文のチェックを求めたりと言う場面もあった。このように生徒の側からアプローチしてくるような課題を与える必要性を強く感じた。

今回の課題の中で、初めて定期試験の結果を分析してみたが、どこで生徒が躓いているのか、どこが間違えやすいのか、なぜ間違えたのかを把握することができた。また、リサーチクェスチョンを設定し、授業評価をさせる（してもらう？）中で、自分自身の授業での改善すべき部分、生徒に理解させるための有効な手段が形となって少し見え始めてきたようである。アンケート等は生徒一人一人がどのように評価しているか、感じているか、また、一斉授業では見えにくい生徒一人一人の理解度を知りたいと思い、１学期は記名できる形にし、記名するか無記名かは自由とした。２学期は数の変動、生徒の感じ方を見ることに重点を置いたため無記名とした。結構辛辣なことを Comments 欄に書いてくる生徒もおり、軽くショックも受けたが、反面、おとなしく座っている生徒が授業を楽しんでいることが解ったりと非常におもしろい結果を得ることができた。点数だけでは、計れないものがアクションリサーチにはあることも解ったが、もっと授業評価システムを活用し、授業を工夫するために内容も多岐に渡って調査していきたい。なお、前述「何もしないで過ごす」生徒たちは、２学期半ば頃より個人的に趣味や好きなことについて話をする機会に恵まれ、以降、時々は授業に参加するようになってきた。さらに、目に見える結果としては２学期には ticket（参加点）が０枚の生徒はいなくなった。やはり仮説４でたてた interaction の構築、生徒との日常的なコミュニケーションが授業作りには不可欠である事を付け加えたい。年度当初と比較して、私自身が本クラスで授業をすること、いっしょに授業を作り上げることを楽しめるようになったことは言うまでもない。

＜参考文献＞

佐野　正之（２０００）『アクション・リサーチのすすめ』　大修館書店

佐野　正之他「アクション・リサーチでの授業改善」『STEP 英語情報』

２００２．５・６月号～２００３．３・４月号　日本英語検定協会